

I
|
1
中国の中の日本像

陳舜臣

「中国のなかの日本像」というタイトルでお話をするのですが、これまでの日文研のシンポジウム、あるいはフォーラムで、ごく境界の近いテーマがとりあげられていますので、なるべくそれとの重複を避けて、話を進めたいと思います。ただ私は系統的な研究者ではありません。そのため羅列的になるかもしれませんので、あらかじめ御諒承をお願い致します。中国のなかの日本像の基本に、私は「東方」という観念があると思いますので、まずそれから入って行きたいと思います。

東は「日の出」、西は「日没」ですから、中国に限らずどんな民族も、この方角にたいしてはアコガレと畏敬の念をもっていると思います。中国の地勢をみると一目瞭然ですが、西は山で東は海です。中国の大河は、黄河であれ揚子江であれ、あるいは淮河であれ、すべて西から東に流れます。蘇東坡の「赤壁詞」は「大江東に去り」とはじまります。その河の源はどこにあるかというのが、中国人にとっては一つのロマンでありました。西へ西へとさかのぼり、その源は崑崙山にあると考えられたのです。そして、その河が海にそそぎ、さらに東へ東へ行ったところに、蓬萊、方丈、瀛州の三神山があると信じられました。山というのは鳥のことです。西の神聖なる山には西王母がいて、不死の薬を持っているという説話があります。その薬を盗んだ嫦娥がヒキガエルになって、月のなかにとじこめられたのです。東の三神山にも仙人がいて、不老不死の薬をもっていると信じられました。この点、東と西は左右相称、シンメトリーになっています。

けれども序列からいえば、日の出の東の方が先であります。東西南北と申します。麻雀では東南西北ですが、いずれにしましても、東が

先頭です。日の出る方角ですからとうぜんでしょう。中国では五行説と申しまして、なんでも木、火、土、金、水に配分します。方位のトップの東は、とうぜん木です。四方ですから、五行は一つあまりですが、それは真ん中です。色も、東は青、南は赤、西は白、北は黒、そして真ん中は黄色となります。日本の相撲は、土俵が円いので方角がわからなくなるので、四方に房を垂らして、わかりやすいようにしています。青房という東で、赤房は南です。四季も、最初の春は東、夏は南、秋は西、冬は北にふりわけられています。四神獣も、東は白、夏は黒、冬は青、北は赤にふりわけられています。色と季節を組みあわせると、胸ときめく「青春」となります。

中国の韻をふみますので、響きを同じくする字をグループごとに集めた韻書が作られています。詩を作る人の虎の巻ですが、韻の数はほぼ百六あり、それぞれ代表的な文字で呼んでいます。そのトップは「東」です。ヒガシのほかワラベの「童」とか、同じの「同」とか交通の「通」とか、同じ響きの字はたくさんあるのですが、その代表を「東」として、しかも百六のグループをならべるとき、序列第一にしています。「東」のイメージは第一番、ナンバー1です。

『論語』は中国人が二千数百年来、バイブルのように読んできた古典ですが、そのなかに、「子曰く、道行われず、桴に乗りて海に浮かばん」という句があります。孔子がある日、中国では自分の理想とする道徳が行われそうもないから、いつそのこと、桴に乗って海に出よう、と言ったのです。海に浮かぶというの、外国に行くことにほかなりません。前述したように、中国人にとって海とは東の方角であり

ます。春秋時代の乱世の中国よりも、すこしはマシな土地が東海の彼方にあると、ぼんやり考えられたのかもしれませんが。これに対応することばが、『論語』の別の箇所にあります。

「子、九夷に居らんと欲す。或るひと曰く、陋しきこと之を如何。子曰く、君子之に居らば、何の陋しきことか之有らん」

これまた孔子が道が行われないのを歎き、九夷にでも移住しようと言ったのです。九夷とは九つの夷、夷はエビスです。征夷大將軍とか、尊皇攘夷の「夷」です。孔子の時代は、おなじ外国人でも、おもに東に任んでいるのを「夷」と称していたのです。九夷とは九つの東の民族という意味らしいのですが、皇侃（四八八―五四五）の『論語義疏』に、その九つの民族を列挙しています。倭人すなわち日本がその八番目にはいっています。

孔子のことばをきいた或る人が、「九夷の土地はむさ苦しいところですが、どうしますか？」と言ったところ、孔子は、「君子がそこに住めば、むさ苦しさは消えてなくなるものだよ」と答えたというのです。江戸時代の儒者、たとえば伊藤仁斎などは、孔子が来たがったのは日本であると解して、日本はすぐれた国なので、孔子が中国を去って夷に居らんと願ったのは無理もないと書いています。これにたいして荻生徂徠は、わが日本のすぐれたことを、なにもわざわざ論語をもち出して説くことはないと反論したのは有名な話です。

「夷」が持つダブルイメージ

「夷」という字をよく見ると、大という字と弓という字が組み合され

ています。一世紀の末に書かれた『説文解字』によりますと、大きな弓を持つ人となっています。けれども、殷の甲骨文字や青銅器に鑄造された古い形は、人間を側面から見て、膝をかがめ、腰をすこし落とされた形、あるいはタテヒザの形になっています。おそらくふだんそんな恰好をしていた民族なので、そんな字をあてたのでしょう。

現在の私たちの感覚では、膝をかがめて採み手なぞする姿勢は、たいそうへり下った、おとなしい感じがします。けれども、孔子の時代、現在の日本の正坐にあたるのが正しい姿勢でありましたから、膝をまげたり、うずくまった姿勢は無作法とされていたのです。『論語』のなかにも、孔子が幼友達の前原とていう男が立て膝をして待っていたので、「おまえは年をとっても無作法がなおらないなあ」と、持っていた杖でその脛を叩いた話が出ています。

礼儀知らずの野蛮人というので、東方の異民族にその恰好をあらわす字をあてたのでしょう。けれども、その字形が変化すると、大きな弓を持つ勇ましい民族というふうに解釈されました。文字にはイメージがあります。つくられたときは異なったイメージが与えられても、イメージであることに変わりはありません。『説解言字』は千九百年前に書かれ、歴代の学者がその記述をうけいれたのです。さて、こじつけるわけはありませんが、中国人のなかの日本像に、「夷」という字のもの形と、あとでつけ加えられたイメージの両方がダブっているように思われます。

大弓を持つ、つまり強力な武器をたずさえて、攻めこんでくる勇猛な民族というイメージがある反面、腰をかがめて、おだやかに対応す

る平和な民族というイメージがあります。

ともあれ、古代中国で異民族をあらわす文字が、「蛮」のようにムシがついていたり、「狄」のようにケダモノヘンであったりするのは、くらべて、「夷」の字はとにかくにもケダモノでもムシでもないのはありがたいことで、蛮や狄ほどマガマガしいイメージはないわけです。日本のシノロジストがかならずといってよいほどお世話になっている段玉裁（一七三五—一八一五）という学者がいます。十八世紀から十九世紀にかけての清の言語学者ですが、この人は『説文』にくわしい註をつけたことで知られています。そのなかの「夷」のくだりにはこんなふうに書いてあります。——夷という字がムシやケモノヘンでないのは、すこぶる順理の性——理にしたがう性質があり、風俗は仁で寿つまり長生きするめでたい民族だからということ。その一節を引用しますと、「君子不死の国有り、按ずるに、天大にして地も大、人も亦た大なり。大をもつて人に象る」と、これはもう絶賛であります。ではなぜ弓がはいるのかといえば、東方の民は弓矢の材料を貢物として持ってくるからだとしています。いささか苦しい解釈のようですが、これなら勇猛とか兇暴といったイメージは消えるわけです。

異民族についての伝説がございます。これは『史記』にも載っておりまして、歴史的事実の反映があるように思うのですが、時代は聖天子堯のころです。そのつぎの天子である舜がまだ堯を補佐していた時期で、すべて舜の業績となっています。これは日本が去年から使っております「平成」という元号とも関連があることです。舜は各部族の

秀才を起用して、業績をあげました。うまく政治がおこなわれ、地平らかにして天成る。内平らかにして外成る、と理想の状態になったのです。そこから「平成」という元号が由来しました。ところが、いくら堯・舜でも人物登用が成功するとは限りません。失敗例もありました。灌兜かんとうという人物、私は彼を代表とする部族名と解していますが、彼が共工かんとくという人物を推薦しました。で、使ってみますと、これがデタラメだったので、北の幽陵に流して北狄にしたのです。そして推薦者の灌兜も罪に問われ、南の崇山に追放されて南蛮となりました。つまり信賞必罰です。また江淮地方で治安をみだした三苗という部族を西の三危山に移して西戎としました。そして黄河の治水に失敗した鯀こんを羽山におしこめて東夷としたのです。これは『史記』五帝本紀にある記述です。東夷、南蛮、北狄、西戎の由来がここにあります。周辺諸民族についての考え方は、もと中原にいたが、悪いことをしたので追放された者たちの子孫だというのが基本です。

カーメン・ブラッカーさんの講演は、「救い主としての来訪者」というタイトルがついています。その内容については、私はとうぜんなにも知りませんが、かねがね私は天孫降臨、神武東征など、日本の伝説、神話は外から来るのがベースで、中国は反対に中央から外へ追放されるのがベースであると思っています。

ところで、鯀は東の羽山に幽閉されて東夷にされます。しかし、ついで舜の時代に黄河の治水に成功したのが、鯀の息子の禹でありました。鯀が東夷になっていたとすれば、その子の禹も夷、つまりエビスではありませんか。しかもこの禹は夏王朝という中国最初の世襲王朝

の初代の天子であるのです。どうやら夷というのは、蛮や狄にくらべて、レベルが高いような気がします。鯨は治水に失敗して東夷に殺れますが、なんとなく緊急避難の形で、すぐに中原の民に戻るため待機している感じですか。その子の時代に中原復帰をはたし、しかも天子になってしまったのです。

徐福と日本の関係

もうすこし「夷」という字にこだわってみましょう。

一八三二年のことです。東インド会社のアマースト号という船が中国の沿岸を北上しました。一種の偵察です。アヘン戦争の八年前のことです。中国、当時の清朝は日本と同じように鎖国をしています。ですから、接岸しようとするれば、その土地の役人に追い払われるのです。このアマースト号が上海にはいった時、呉其泰というその地の長官が、「対外貿易は広州でしか許されない。当地では禁じられているのです。みやかに立ち去れ」という書面を渡して厄介払いしようとしたのです。そしてその文中に、この「夷」という文字があったのです。「お前たち夷商は……」という言い方でした。

アマースト号の船長はリンゼイという人で、船内にはギュッラフというプロテスタントの宣教師がいました。たいへんな学者で、中国語の読み書きが自由にできたのです。もちろんこのギュッラフのアドバイスでしょうが、リンゼイ船長は、夷ということばは侮辱である、と抗議を申し入れたのです。本国の体面にもかかわる大問題だ、われわれはただの外国であって夷国などではない、という抗議でした。上海

の長官呉其泰は、このとき、夷というのはなにも侮蔑の意味を含まないと返事しているのですが、その例として、『孟子』のなかに、「舜は東夷の人なり」とあるのを引用しました。

たしかに『孟子』にそのくだりがあります。舜は中国の聖天子であり、その人が東夷とされているのですから、夷には侮蔑のニュアンスがない例証になるでしょう。ところが敵もさる者で、ギュッラフは中国の古典に通暁しています。蘇東坡の文章に、「夷狄は中国の治を以て治むべからず」とあるのを引用して、やはり侮蔑の意味があると反論したのです。呉其泰はやむをえず、夷商を該商と書き直してケリがつけました。

夷ということばは、ときにはあまり侮蔑の意味を含まず、舜は東夷の人といっても、東方の辺鄙な土地の出身というほどの気持で使うこともあったのです。そして、後代になればなるほど、侮蔑の意味が重くこめられたようです。これが端なくも十九世紀前半のアマースト号論争にあらわれたのです。

くり返しますが、夷は蛮や狄にくらべて、開化の度合が高く、ときには夷から聖人や天子が出るのです。従って、東夷に属する日本も、ムシやケダモノヘンのつく南や北の人たちにくらべると、中原により近いというイメージをもたれていたのです。

それどころか、さきにふれました段玉裁の『説文解字』註のように、東夷は長生きで、不死の君子国であるという、むしろ中原よりランクが上ではないかと思われる記述もあります。

これは西のはての崑崙山に住む西王母が不死の薬を持っているのと

ペアになって、東のはての三神山には不老不死の薬を知る仙人がいるという伝説と関係があるでしょう。

『史記』には三神山とありますが、『列子』には渤海の東に五山ありとなっています。蓬萊山がその代表ですが、『山海経』註によれば、そのの宮殿はみな金や玉でつくられ、鳥獣はみな白く、これを望めば雲が渤海の中にあるようだ、夢のようなことを書いています。秦の始皇帝が不老不死の薬が欲しくて、徐福という者に命じてそれを取りに行かせた話はあまりにも有名です。

日文研第十六回フォーラムで、汪向栄さんが「弥生時期日本に來た中国人」というテーマでスピーチされていますが、徐福にはすこしだけしかふれられていません。じつはその半年ほど前、佐賀で徐福についてのシンポジウムがあり、汪向栄さんと一緒に、そこでおうかがいしたことがあり、おそらく重複を避けられたのだと思います。そのシンポジウムで、徐福について私が述べた概略をここで申し上げます。というのは、中国人にとって日本とは、連想ゲーム的にいえば、かならず反射的に徐福という固有名詞が出てくるからです。

日本では徐福は伝説扱いにされていますが、徐福が東海に船出したのは『史記』の記述者である司馬遷誕生の七十年ほど前のことです。ほぼ同時代の記録といってもよいでしょう。現在の三十代の歴史家が、日清、日露のころのことを記述するのにひとしいのです。日清、日露の目撃者はいないでしょうが、目撃者からじかに話をきいた人は日本にはいまおおいいます。そんな人からその時代の取材はできるわけです。

燕の刺客荊軻が始皇帝暗殺に失敗した事件について、その場にいた始皇帝の侍医の夏無且かむしよから、公孫季功と董生の二人が一部始終を聞き、司馬遷はその二人から取材したと述べています。司馬遷は丹念な取材調査をする歴史家です。

徐福の船出はこの荊軻事件よりも十年ほどあとのことです。しかも司馬遷は『史記』始皇帝本紀だけではなく、淮南衡山列伝にも、そして封禅書にもこの件についてふれています。まぎれもなく実在の人物であったのです。

おなじみ『三国志』呉書黄竜二年（二三〇）につぎの記述があります。

——將軍衛温、諸葛直を遣わし、甲士万人を將ひきいて海に浮かび、夷洲及び亶洲たんしゅうを求めしむ。亶洲は海中に在り、長老伝え言う、秦の始皇帝方士徐福を遣わし童男童女数千人を將ひきいて海に入り、蓬萊神山及び仙薬を求めしむるに、此の洲に止まりて還らず、世に相承け数万家有り。……

三国時代の呉は人口の過疎に悩みました。人口がすくないのは、兵力もすくないことを意味し、この乱世では生きのびるために、人を増やすのが大問題でした。戦乱と疫病、それに逃亡で、人口は減る一方なので、呉の孫権は頭を悩ませていたのです。そのときに、徐福のことを思い出した人がいたのです。徐福は日本にとどまって、その子孫は数万の戸数をもつに至っているというのです。その人間を狩り集めようという名案でした。ところが、亶洲に至りつけず、夷洲で数千人かき集めただけです。それだけならいいのですが、一万人で出発した

のに八割以上が疫病で死んだというのです。一万人が二千人に減って、数千人の人狩りをして、これではかえってマイナスで、衛温と諸葛直は処刑されてしまいました。これは私の推測ですが、八割は疫病で死んだのではなく、逃亡したのだと思います。徐福も始皇帝に金を出させて、集団亡命を企てたのが真相でしょう。全体主義体制の嚴罰主義の社会では、人は住みにくいもので、亡命を考えるのはとうぜんでしょう。三国時代の呉も、かなりきびしい体制だったのです。そんなときに、人びとは四百年前にうまく亡命した徐福のことに、思いをいたしたのだと思います。

日本人像の原形

この人狩事件の九年後、すなわち景初三年（二三九）、邪馬台国女王ヒミコの使者難升米らが魏に到着し、金印や銅鏡をもらっています。朝鮮半島が魏の勢力圏にはいったので、邪馬台国と魏との交通が可能になったのですが、朝鮮半島沿いの交流のほかに、東シナ海を渡って、呉と日本との交通もあったことは注意すべきであります。けれども、いくら交通がひらけたといっても、ごく一部の人が使節として渡航するだけでした。中国側からみれば、少数の使節を通してしか日本像はつくられません。一般は依然として、海中三神山という夢まぼろしの伝説が濃厚に支配していたのです。隋から唐にかけて、日本の使節がかなり頻繁に行くようになってからも、中国のなかの日本像にそれほど変化があったとは思えません。

遣唐使は、日本側がベストメンバーを選んだようで、中国の日本像

には良い影響を与えたとおもわれます。朝衡、すなわち阿部仲麻呂などは、唐の朝廷に仕え秘書監として閣僚クラスまで昇進しています。そして、王維や李白といった当時の大詩人につき合っているのです。仲麻呂は日本に帰ろうとして、暴風でベトナムに漂着し、ついに帰国できずに唐に戻りました。一時、仲麻呂は船が沈没して死んだという誤報が伝えられたようです。李白は「朝暉を哭す」という追悼の詩を作っています。

日本の晁郷 帝都を辞し

征帆一片 蓬壺を遶る

明月帰らず碧海に沈み

白雲愁色 蒼梧に満つ

ここにいう蓬壺、よもぎの壺というのは、海中三神山の蓬萊のことです。形が壺型になっているのでそう呼ぶのですが、八世紀の唐の大詩人の日本像は、依然として海中三神山伝説からそれほど出ていないようです。

蘇鄂という人のあらわした『杜陽雜編』という本は、おもに中唐の逸話を集めたものですが、そのなかに日本人が登場するのがあります。その一つは大中年間に唐に渡った日本の王子の話です。大中といえは八四七―八五九で、このあいだ日本からは正式の遣唐使の派遣はありませんでした。『杜陽雜編』はエピソード集といいますが、小説的な要素のほうが強いようにおもいます。日本の王子というだけで、名前は書いていません。この王子はたいそう碁が強く、顧師言という唐随一の碁の名人と対局したのです。結果は顧師言の辛勝でした。負けた

あと日本の王子は「顧先生は唐で何番目に強いのですか？」ときいたので、外務大臣に相当する鴻臚卿が、とっさに「三番目です」と答えたというのです。じつは唐の最高の名手ですが、見栄を張ってそう言ったのでしょうか。日本の王子は、「小国最高の棋士も大国第三位の者に及ばないのか」と、ため息をついたという話です。

もう一つ日本人が登場する話は、細工の天才であります。韓志和と、この物語には主人公の名前は出ていますが、どうも日本人らしくない姓名です。この人は飛竜衛の衛士、すなわち近衛士官だったのです。唐は世界帝国でしたから、外国人が近衛士官になってもおかしくありません。安禄山だって雑胡、イラン人とトルコ人の混血だったのです。さきほど申しましたように、阿部仲麻呂も唐の閣僚に昇進しているのです。

日本人韓志和には「雕木」という特技がありました。木を彫って鶴や鳥、鵲などをつくりますが、その作品はまるで生きているように、ものをついたり鳴いたりしたのです。腹の中にゼンマイ仕掛を仕込むので、鳥たちは三十メートルほどの高さ三百メートルくらい飛んだそうです。このことをときの皇帝穆宗に言上した者がいて、彼の作品が天覧に供されることになりました。

彼が心魂こめて制作したのは「見竜床」です。高さ数尺の踏み台ですが、その上に金銀や綾絹の飾りが施してあります。それを見るだけでは竜はあらわれないのです。踏み台にのぼると、竜のウロコやタテガミ、爪やキバまでありありと見えるようになります。皇帝が足をのせると、竜はのっそりと動き出し、臆病な穆宗は、「おそろしや、

おそろしや。こんなものはあっちへ持って行け」と、ご機嫌斜めであります。なんともだらしない皇帝です。皇帝のご機嫌を損ねると、たいへんなこととなります。韓志和はこんなことがあるかもしれないと予想したのか、あらかじめ別の物を用意してきたのです。それは「蠅虎子」といって、跳びあがって蠅を取るクモの一種でした。彼が懐から取り出した桐箱のなかに何百という蠅取りグモがはいっていたのです。韓志和の命令一下蠅取りグモは五列にならび、当時流行していた「涼州の舞」を舞ったのです。穆宗が王室オーケストラに演奏させると、ちゃんとそれにあわせて踊り、曲が終わると、ぞろぞろと箱のなかに戻る。韓志和が自分の手にそれをのせたところ、だいぶ遠くにいる蠅におどりかかって、一度も仕損じることがなかった。

穆宗も機嫌を直して、「いささかみるべきところがあった」と、銀碗を褒美に授けた。韓志和は宮殿から出ると、もらった褒美の品を、惜しげもなく他人にくれてやった。その後、一年もたたぬうちに、彼はどこへ行ったかわからなくなった。

『杜陽雜編』のこの二つの話が小説であるとすれば、主人公は日本人でなくてもよかったです。新羅の王子でもよく、アラビア出身の近衛士官でもよいはず。とくに日本人としたのは、やはり唐代の中国の日本像のなかに、碁のような知的ゲームにすぐれているとか、小さな精巧なものをつくるのが上手であるというのがあったからにちがいありません。

宋・元・明にかけて、日本から中国への輸出品は、日本刀が量的に第一でした。数打ちといわれる安物がおもでしたが、中国側では刃が

鋭利なことのほかに、装飾の美しいことをよるこんだようです。欧陽修（一〇〇七—一〇七二）に「日本刀歌」という長詩があります。それにはむろん刀が鋭利なこともうたっていますが、

魚皮もて装貼す香木の鞘

黄と白の閑雑す鏃と銅

と、その美しさをたたえ、「器玩皆精巧」といっております。日本刀のほかに多くの扇子も輸出されました。大きなウチワを小さくする技術、これが日本独特のものと中国人の目に映ったようです。まさにその通りで、二十世紀になっても、日本は事物の小型化、トランジスタ化で世界を席巻したものです。なお欧陽修の「日本刀歌」のなかに、

徐福行きし時 書未だ焚かれず

逸書百篇 今尚お存す

という句があります。

始皇帝の焚書は、中国人にとっては、じつに痛恨のきわみでした。秦以前の名著——諸子百家の書がほとんどほろびたのです。木簡に書き写した古典は、とうぜん部数は多くありません。いくらかくしても、それが伝わるのは困難でした。ところが、徐福の出国は、焚書の六年前です。もし徐福が書籍も持ち出したとすれば、焚書に遭って中国で亡びた古典が、日本に残っていることとなります。欧陽修のいう「逸書百篇」とは、始皇帝に焚かれた『書経』のことです。古代の聖賢言行集である『書経』はもともと百篇あったのですが、焚書のあと、秦の博士が漢に伝えたのが三十三篇にすぎない。あとで孔子の子孫の家の壁から出たといつて二十五篇がつけ加えられたが、これは偽作の疑

いが濃厚です。ともかく『書経』の大半は失われています。それが日本にあるとなると、たいへんなことです。欧陽修の詩はつぎのようにつづいています。

令敵しく中国に伝うるを許さず

世を挙げて人の古文を識る無し

日本は法律がきびしく、書経を輸出するのを禁じているので、中国では古文を知る物がいないことになったといふのです。

書経百篇が日本に伝わったというのは、もちろん事実ではありません。おそらく渡宋した日本僧や商人が、愛国的法螺を吹いたのでしょう。東大寺の齋然（九三八—一〇一六）が渡宋したのは、欧陽修より一世代前のことでした。

けれども、日本は戦乱があつても、源平合戦みたいに内輪揉めていどで、相手を完全否定する破壊はなかったために、文化財がよく残ります。これには家元制度のようなシステムも大いに貢献したでしょう。最も好い例が正倉院です。

本格的な日本研究への期待

先ほど私が引用した皇侃の『論語義疏』も六世紀、梁の武帝のころの著述で、方々に引用されているのに、かんじんの本は中国ではなくなっています。江戸時代、足利学校にあったのを、根本遜志という人が校刻して中国に伝わり、あちらの人を驚かせました。明治のはじめ、日清両国のどちらも鎖国を解き、国交を回復しましたが、清国初代公使何如璋についてきた楊守敬なる人物は、本の目きまでありまして、

中国で亡佚した本を日本でさがすのが仕事で、『日本訪書志』という著述があります。

日本に古書があることは、明治になってわかったのではなく、北宋の歐陽修も伝聞で知っていました。清代の大詩人の龔自珍という人は、中国で亡佚した本のリストを作って、長崎通いの船に託して、調べてもらっています。その依頼状が龔自珍の文集に収められているのです。

ただ、中華思想と申しませんが、日本に限らず外国にたいする関心は、中国では一般に薄いのです。関心をもつ必要もなかったのですが、明代になって倭寇があばれはじめると、やっと日本を研究しなければならぬという気運がうまれました。敵を知ろうということでしょう。それでも対日認識はきわめて粗雑でした。権威あるべき歴史の『明史』日本伝でも、豊臣秀吉は薩摩の人なりなどと書いてあります。

秀吉の朝鮮出兵の経緯も含まれている『両朝平攘録』は、明の諸葛元声のあらわした本ですが、台湾で出た景印本（写真復刻版）をみると、返り点などを振っていますから、日本で収蔵されていたのをリプリントしたのでしょう。おそらく中国では亡佚したか、稀覯本になってしまったのでしょう。この本には豊臣秀吉は魚を売っていて、木の下で眠っていたところ、関白平信長と出会い、舌弁の才でその養子となった。特技は高樹にのぼることだ、と書いています。信長にそむいた阿奇支（アケチ？）を討ちに出たが、信長が明智に殺されたので、とって返した、といった記述もみられます。高樹にのぼるのが特技というのは、秀吉が「猿」と呼ばれたところから出たのでしょうか。い

ずれにしても、明代の日本情報はこの程度です。

実際に日本研究がどうやら始まったのは、明治になって、日清、日露の役のあと、中国から留学生が何万もやって来てからです。それも、彼らは日本に「西洋の学問」を学ぶために留学にきたので、じつは日本研究が本来のテーマではなかったのです。ただ日本に住んでいるので、日本のことがわかった。すくなくとも、『明史』や『両朝平攘録』のような、噴飯ものではない知識を、しぜんに得たというにすぎません。この時期の日本研究は戴天仇の『日本論』あたりが最もすぐれたもので、あとは黄遵憲の浩瀚な『日本国志』以外、見るべきものがないようです。

日本像というとき、本格的な日本研究によって正確な知識なり情報にもとづかないものは、霞んだもの、歪んだものといわざるをえません。じつは本格的な日本研究は、中国ではたっただけ始まったばかりという気がします。日文研などは、それに大いに貢献するだろうと、私は祈るように期待しています。

「近代中国人の日本像」はすでに日文研の重要テーマで、その成果に刮目したいとおもいます。本日、私は中国の霞みがちであった日本像を、ふりかえって見たにすぎません。まとめますと、東という觀念、夷ということばのイメージ、唐代、遣唐使などエリートの人々に接した中国人が抱いた漠然とした印象——頭がいい、暮のような知的ゲームにすぐれている、細工がうまい、細工がうまいという印象は、輸入された日本刀、扇子、蒔絵などによってコンファームされているのですが、こうしたことを最初予告したとおり、羅列的に述べたにすぎま

せん。しかしこのような「日本像」はおそらくこれからの研究によって、あざやかになるはずの「日本像」とつながるとおもいます。

時間がまいりましたので、私のスピーチを終わります。どうもありがとうございました。